慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	妊娠後期から産後在院期間中にかけての妊産婦の心理的変容 : 質問紙による継続的研究
Sub Title	Women's psychological changes from later pregnancy to the period immediately after delivery : longitudinal study using questionnaires
Author	柴原, 宜幸(Shibahara, Yoshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1988
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.28 (1988.) ,p.115- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000028-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

妊娠後期から産後在院期間中にかけての妊産婦の心理的変容
——質問紙による縦断的研究——

Women's Psychological Changes from Later Pregnancy to the Period Immediately after Delivery
—Longitudinal Study Using Questionnaires—

柴　原　宜　幸
Yoshiyuki Shibahara

This study examined the effects of delivery on women's psychological changes. Here, this term "delivery" encompassed not only delivery itself but also mothers' encounter with, touch to and suckle to their newborns. It is generally thought that upbringing begins immediately after delivery, but it is difficult to look upon the period in hospital after delivery as a process of upbringing. From this point of view, two assessments were made: the first one was conducted in later pregnancy (M=35.6 weeks); the second one in the period in hospital after delivery (within 1 week).

The results were as follows; 1) new mothers showed a emotionally highlightened state, which I called "the emotional peak", 2) they modified some of their ideas and 3) they modified some of their life styles. Especially, "the emotional peak" has a theoretical significance because pregnant women raised their emotion even in case of the first assessment.

These findings, however, cannot predict any mother-infant interaction in the future. More systematic study over a long period of time is needed in addition to the operationalization of the ill-defined concept "maternity".

「母性喪失」このことばのもつ意味は非常に大きい。この表現には，「母性」というのは絶対的なものであり，その絶対的なものが失われたことに対する驚きが含まれている。しかし問題点が2つある。1つは，その絶対的な母性とは一体何を指しているのか，という疑問であり，もう1つは，絶対視できるものなのか，という疑問である。

詫摩と大日向（1976）は，母性を「男女両性の成体における，広義の育児欲求および行為」と定義し，横断的調査研究から，母性はその時代の社会的背景によって変化するものであり，時代と共に育児労働への評価が低下してきている，と報告している。つまり，育児形態ではなく，育児に対する構えが問題になっているのである。彼らの定義を受け入れるなら，確かに母性は衰退しているのであろう。さらにこの問題については，養育拒否や親としての準備性欠如といった形で，多方面からの臨床報告[1]がなされている。しかし，母性が時空間的に変わり得るものなら，それは喪失と考えるよりも発達的視点から，母性の形成不全と考えた方がいいのではないかと思われる。

では発達的視点からすると，母性はどのように発達していくと考えられているのであろうか。受胎認知から妊娠過程全般を通して，というのが一般的な見解のようである。即ち，一般に女性が持つ子どもに対する愛情と，母親がわが子に抱く母性愛・母性意識とは本質的に異なるものであり，それは，妊娠・出産・育児の過程を経て長期に渡って形成されていく（牛島，1970；上田，1979），というのである。このことは，実証的研究からもある程度確認されており，受胎によって一旦不適応な状況に追い込まれるが（ホルモンの影響ももちろん無視できない），約40週の妊娠期間のうちに徐々に適応がなされていき，最終的に心理的統合が達成される（九嶋，1978；

利島，1983；細井，1981)。

しかしながら，全ての者が一様にその経過を辿るとは限らず，初期の妊娠に対する感情が，のちの育児に対する姿勢にまで影響を及ぼす可能性があり，妊娠に対する自我関与の度合がその決定因となっていることを示唆した研究（大日向，1981）もある。このような観点に立つと，母性発達には，妊娠以前にその女性が獲得したある種のパーソナリティこそが重要な要因になっていると考えるのも諾ける。例えば，平井（1976）は，母性は，女性が母親になる以前の生活史全般をその形成過程としており，中でも「思いやりの心」（彼は「共感的理解能力」と呼んでいる）の発達を中核としている，という仮説のもとに独特の論を展開している。

これまで，「母性とは何か」について何も答えていない，というより答えられないのが実情である。「母親の愛情の質そのものには，ほとんど照明があてられてきていない」（大日向，1982）のである。筆者自身は「母親が母親たること（あるいは女性が将来母親となること）を受容し，積極的に同一視しようとする傾性」[2] と試論的に定義しておきたい。このように定義することによって，具現化された育児行動ではなく，その背後にある心的作用に「母性」を求めることができる。さらに，母親となる以前からの生活史を通して発達するもの，という観点に立っていることが理解できよう。当然のことながら「性(さが)」を意図しているのではない。

以上のように，「母性」なるものは，女性の全生涯（あるいは一部）を通して形成されてくるものであり，妊娠・出産・育児の過程が少なからぬ影響を与えている，と考えられている。しかしながら，これまで出産という事態は，妊娠過程から育児過程への単なる変換点としてしか捉えられていない。このことは，出産が影響力を持たない，ということを意味しているのでは決してない。母子の肉体的分離が生じ，子宮内で存在感を持っていたものが，自身の肉眼で確かめられ，自身の手によって触れることができる。このような経験が心理的変容に貢献しないとは考えにくい。情緒面の変容はもちろんのこと，もっと固定的な観念や生活設計の変更をも促すかも知れない。加えて，出産後の在院期間中は，本来的意味での育児過程ではなく，まだ自分が世話をされる側なのである[3]。換言すれば，社会的現実の中での育児過程は退院後から始まる，と考えられる。

本研究は，このような観点から，陣痛から産後在院期間中を出産過程と捉え，出産という経験が，妊産婦の心理にいかなる変容をもたらすのかを調べるために実施された。また，先述のごとき理由から，「母性」なる用語を意図的に避け，多義的になるのを承知の上で，「妊産婦の心理」という言葉を用いた。

方　　法

被調査者　都内3ケ所及び大阪市内1ケ所の，4つの総合病院の産婦人科において調査を実施した。調査期間は，産前調査（以下［Ⅰ］と略す）が 1986 年 9～10 月であり，産後調査（以下［Ⅱ］と略す）は，それぞれの出産日に応じて適時であった。

被調査者は，各病院の産婦人科外来に定期検診のために訪れた，妊娠 30～39 週（平均 35.6 週）の第一子出産予定の妊婦である。調査の依頼は，外来窓口で担当看護婦によってなされた。条件は，第一子出産予定であること，妊娠後期であること，医学的問題がないこと，の3点である。その結果，［Ⅰ］については 126 名（回収率85%），［Ⅱ］については 80 名（回収率 98%）の協力が得られた。［Ⅰ］から［Ⅱ］での被調査者の欠損は，全て里帰り分娩等による出産病院の変更に起因していた。

手続き　実施要領は，各病院の都合上若干異なる点があるが，基本的には次の要領である。外来にて該当する妊婦に［Ⅰ］を配布し，回収する。［Ⅰ］を実施した妊婦が出産後，在院期間中（出産後1週間）[4] に［Ⅱ］を配布し，退院までに回収する。

これら一連の手続きは，担当看護婦によってなされたが，縦断研究の性質上，［Ⅰ］と［Ⅱ］が同一被調査者に渡るよう留意すること，また，［Ⅰ］の回収が確認されるまでは［Ⅱ］の配布を行なわないこと，を厳守してもらった。なお，［Ⅰ］と［Ⅱ］との被調査者の同定は，無記名のため，subject no. またはカルテ番号によって確認した。

被調査者の産後状態による［Ⅱ］の実施の可否は病院側に委ねたのであるが，幸いにもそのために実施を見合わせた事例は見られなかった。

調査票（表1）　［Ⅰ］は30項目，［Ⅱ］は23項目で構成されているが，本論では，主に次に掲げる10項目について言及する。これらの10項目は［Ⅰ］［Ⅱ］に共通の項目であり，大別して3つの測度から構成されている。それらは，

・情緒的測度
　①幸福感[5]　②後悔感　③育児不安　④夫の喜び
・観念的測度
　⑤出産観[6]　⑥子ども観　⑦育児観　⑧母親観
・生活的測度

表 1　質問項目

①「幸福感」
現在，妊娠していることが(出産して)，
イ．とてもうれしい(良かった)
ロ．うれしい(良かった)
ハ．どちらとも言えない
ニ．あまりうれしくない(良くなかった)
ホ．まったくうれしくない(良くなかった)

②「後悔感」
現在，妊娠していることを(出産したことを)，
イ．とても後悔している
ロ．後悔している
ハ．どちらとも言えない
ニ．あまり後悔していない
ホ．まったく後悔していない

③「夫の喜び」
あなた自身，現在あなたの夫が今回の妊娠(出産)を喜んでいると思われますか。
イ．とても喜んでいると思う
ロ．喜んでいると思う
ハ．どちらかわからない
ニ．あまり喜んでいるとは思わない
ホ．喜んでいるとは思わない

④「育児不安」
これから迎える出産後の（始まる）育児について，
イ．とても不安
ロ．やや不安
ハ．どちらとも言えない
ニ．あまり不安ではない
ホ．まったく不安ではない

⑤「出産観」
あなたの人生にとって，出産はどういう意味をもっていますか（もっていると現在お考えですか)。
イ．人生最大の出来事
ロ．比較的大きな出来事
ハ．それほど大きな出来事とは思わない
ニ．人生の一コマにしか過ぎない

⑥「子ども観」
あなたは，子どもはどういうものだと思いますか(と，現在お考えですか)。
イ．神や天から授かるもの
ロ．自然にできるもの
ハ．計画的につくるもの

⑦「母親観」
生まれてくる（きた）子どもは，あなたを必要としていると思いますか。
イ．とてもそう思う
ロ．そう思う
ハ．どちらとも言えない
ニ．あまりそう思わない
ホ．まったくそう思わない

⑧「育児観」
子どもを育てるということは，(現在の)あなたにとってどういう意味をもっていますか。
イ．生きがいができる
ロ．どちらとも言えない
ハ．自分の生きがいが犠牲になる

⑨「授乳方法」
出産後(今後)，順調に母乳が出るとしたら，
イ．母乳だけで育てる
ロ．母乳と人工乳で育てる
ハ．人工乳だけで育てる

⑩「就労希望」
あなたは出産後(現在)，御自身の職業についてどう考えておられますか。
イ．専業主婦でやっていく
ロ．すぐにでも職業をもちたい
ハ．子どもが幼稚園に入ったら職業をもちたい
ニ．子どもが小学校に入ったら職業をもちたい
ホ．子どもが中学校に入ったら職業をもちたい
ヘ．その他（　　）

*　各質問項目のカッコ内は［II］での質問方法を表す。
**　これは実際に実施された質問項目であり，表 2—11 では，コーディングがなされている。

⑨授乳方法　⑩就労希望

である。

また，［II］の最後に設けた自由記述の欄についても，予想以上に多くの記述が得られたため，若干の考察を加えることにする。

分析　本研究は妊娠後期と産後在院期間中とにおける妊産婦の心理的変容の方向性を問題にしており，さらに，尺度上の難点も加わっていることから，符号検定 (sign test) が用いられた。

結　　果

1. 情緒的測度

まず，情緒的測度における結果について述べる。情緒的測度には，妊産婦自身の喜び，後悔，育児不安，および夫が喜んでいると思うかどうかの妊産婦の認知が含まれている。表2・3・4から分かるように，妊娠後期においてほとんどの者が後悔することなく喜びを感じ，また自身のみではなく，夫も喜んでくれていると感じてお

表 2 「幸福感」

・妊娠している（出産した）ことが

Ⅰ ＼ Ⅱ	5	4	3	2	1	計	%
とても嬉しい：5	40	4	0	0	0	44	55.0
嬉しい：4	23	7	0	0	0	30	37.5
どちらとも：3	3	2	0	0	0	5	6.3
あまり：2	0	1	0	0	0	1	1.3
全く：1	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	66	14	0	0	0	80	100
%	82.5	17.5	0.0	0.0	0.0	100	

表 3 「後悔感」

・妊娠（出産）したことを

Ⅰ ＼ Ⅱ	5	4	3	2	1	計	%
全く：5	60	2	0	0	0	62	80.5
あまり：4	11	0	0	0	0	11	14.3
どちらとも：3	2	1	0	0	0	3	3.9
やや後悔：2	0	1	0	0	0	1	1.3
とても後悔：1	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	73	4	0	0	0	77	100
%	94.8	5.2	0.0	0.0	0.0	100	

表 4 「夫の喜び」

・夫は現在……と思う

Ⅰ ＼ Ⅱ	5	4	3	2	1	計	%
とても喜んでいる:5	49	3	0	0	0	52	65.0
喜んでいる:4	15	8	2	0	0	25	31.3
どちらとも:3	1	1	0	0	0	2	2.5
あまり:2	0	1	0	0	0	1	1.3
全く:1	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	65	13	2	0	0	80	100
%	81.3	16.3	2.5	0.0	0.0	100	

り，その意味ではアンビバレントな反応も見られず，非常に積極的に，妊娠後期であるという状況を受容する気持ちを有していることが伺える。産後調査における，出産をした事に対しての気持ちにもそれらと同様の傾向が見られ，やはり出産をしたという事実に対して，積極的に受容していることが分かる。

しかしその一方で，約65%の者が産前において既に，これから始まる育児に対して多かれ少なかれの不安を抱いている。わが子との対面を果してより現実的実感となるからか，産後においては，どちらとも言えないといった曖昧な回答は減っており，約 69% の者が育児不安を訴えている（表5）。

表 5 「育児不安」

・これから始まる育児について

Ⅰ ＼ Ⅱ	5	4	3	2	1	計	%
全く：5	3	2	0	0	0	5	6.3
あまり：4	2	6	1	4	1	14	17.5
どちらとも：3	0	3	1	3	2	9	11.3
やや不安：2	0	5	2	23	9	39	48.8
とても不安：1	0	0	0	8	5	13	16.3
合計	5	16	4	38	17	80	100
%	6.3	20.0	5.0	47.5	21.3	100	

2. 観念的測度

次に，情緒とは異なり，比較的長期に渡って一貫性を示すと考えられる観念的測度について見てみる。「出産観」は，出産という出来事を自己の人生の中で位置づけてもらったものであるが，出産前後を問わず，大きな出来事と捉えていることが分かる（表6）。しかし，個々の事例を見てみると，出産後，大きな出来事であると捉え直した者もいる一方で，さほど特別視するほどの事ではないと考えるようになった者もあり，出産事態およびその医学的処置が媒介となっていることが，充分に考えられる。

表 6 「出産観」

・出産は人生にとって

Ⅰ ＼ Ⅱ	4	3	2	1	計	%
最大の出来事：4	27	1	0	1	29	36.3
比較的大きい：3	13	31	1	1	46	57.5
それほど：2	0	1	0	1	2	2.5
一コマ：1	0	3	0	0	3	3.8
合計	40	36	1	3	80	100
%	50.0	45.0	1.3	3.8	100	

「子ども観」については，出産前後とも 70% 弱の者が，授かりものと考えている（表7）。しかしこの中には，計画妊娠である者も含まれている（[Ⅰ][Ⅱ]共15名）ことや，無回答および複数の回答もあったことから考えると，一次元尺度で回答できないといった質問項目

表 7 「子ども観」

・子どもとは……ものである

Ⅰ＼Ⅱ	3	2	1	計	%
授かる：3	48	2	2	52	67.5
できる：2	3	12	3	18	23.4
つくる：1	0	0	7	7	9.1
合　計	51	14	12	77	100
%	66.2	18.2	15.6	100	

自体の問題もある。

妊産婦が，子どもにとって母親は必要な存在である，と考えているかどうかを調査したのが，表8の「母親観」の項目である。これについては，産前・産後とも，大多数の者（それぞれ 93%, 96%）が，自分は子どもにとって必要な存在である，と考えている。実感としてではないのかも知れないが，母親としての責任を感じているものと思われる。さらに，子どもが生きがいとなるかどうかを問うた「育児観」においても，産前・産後を通して，多くの者が生きがいができる，と考えており（表9），その点では情緒的測度同様，母親となる（母親である）ことを積極的に受容していることが分かる。

表 8 「母親観」

・母親は子どにとって

Ⅰ＼Ⅱ	5	4	3	2	1	計	%
とても必要：5	42	7	0	0	0	49	61.3
必　要：4	11	12	1	1	0	25	31.3
どちらとも：3	1	4	0	0	0	5	6.3
あまり：2	0	0	0	1	0	1	1.3
全　く：1	0	0	0	0	0	0	0.0
合　計	54	23	1	2	0	80	100
%	67.5	28.8	1.3	2.5	0.0	100	

表 9 「育児観」

・育児は

Ⅰ＼Ⅱ	3	2	1	計	%
生きがい：3	55	2	0	57	72.2
どちらとも：2	10	11	1	22	27.8
生きがいが犠牲：1	0	0	0	0	0.0
合　計	65	13	1	79	100
%	82.3	16.5	1.3	100	

3. 生活的測度

最後に，出産退院後の生活について項目設定をしたのであるが，純粋の希望として問われているのか，個々人の置かれた社会的制約下における，その中での選択範囲として問われているのかが，明確にされていなかったことを断わっておく。

母乳か人工乳かの論争は未だ絶えないが，かなりの母乳指向が見て取れよう（表10）。即ち，人工乳だけで母乳は与えない，という者は［Ⅱ］ではおらず（［Ⅰ］でも1名），人工乳との併用を含めて，全ての者が母乳で育てようとしている。なお，就労希望（表11）については，心理的変容の結果のところで述べることにする。

表10 「授乳方法」

・授乳は

Ⅰ＼Ⅱ	3	2	1	計	%
母乳だけ：3	59	2	0	61	77.2
母乳と人工乳：2	9	8	0	17	21.5
人工乳だけ：1	0	1	0	1	1.3
合　計	68	11	0	79	100
%	86.1	13.9	0.0	100	

表11 「就労希望」

・就労の時期は

Ⅰ＼Ⅱ	5	4	3	2	1	計	%
専業主婦：5	17	1	1	0	0	19	28.4
中学校入学後：4	0	1	0	0	0	1	1.5
小学校入学後：3	2	3	12	3	0	20	29.9
幼稚園入園後：2	0	0	4	13	0	17	25.4
すぐにでも：1	2	0	0	0	8	10	14.9
合　計	21	5	17	16	8	67	100
%	31.3	7.5	25.4	23.9	11.9	100	

4. 心理的変容

まず，情緒的測度についてであるが，先に示したように，ほとんどの者が妊娠後期から産後在院期間中にかけて，一貫して受容的反応を示していた。表12に示したように，変容に注目してみると，より否定的になった者よりもより肯定的になった者の方が有意に多いことが分かる。即ち，「幸福感」「後悔感」では，妊娠後期において既に，かなり受容的であったのが，出産を経てさらに受容的になっている（符号検定の結果［以下略］それぞれ，

表12 「心理的変容」（符号検定）

	N	+	−	
幸福感	80	29	4	***
後悔感	77	15	2	**
夫の喜び	80	18	5	**
育児不安	80	20	22	
出産観	80	17	5	**
子ども観	77	3	7	
母親観	80	16	9	
育児観	79	10	3	*
授乳方法	79	10	2	*
就労希望	67	11	5	

* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

$p<0.001$, $p<0.01$)。そのことは夫の喜びにも反映され，出産後はさらに多くの者が，夫も喜んでいる，と感じ取っていることがわかる（$p<0.01$)。しかし育児不安については，半数以上の者が回答を変更したのにもかかわらず，一貫した方向が見られず，新生児の状態や，わが子との対面・接触・授乳といった経験的要因が，大きな影響を与えたのではないかと推測できる。

次に，観念的測度の分析結果であるが，4項目のうち「出産観」「育児観」の2項目において，有意な変容が見られる（それぞれ，$p<0.01$, $p<0.05$)。「出産観」が変容することは驚くに当たらない。なぜならば，出産そのものを実体験したのであるから，以前の観念が修正されるのも不思議ではないからである。しかし，出産をより大きな出来事だと再認識した者の方が有意に多いことは，注目に値する。「育児観」では，生きがいを見い出す方向に変容した者の方が有意に多いが，変容をした絶対数がそれ程多くないこと，あくまでも在院中の調査であり，帰宅後の社会生活を営んだ上での観念ではないことを念頭におく必要がある。さらに，わずか1例ではあるが，生きがいが犠牲になると捉え直した者もいる点には留意しておかねばならない。「子ども観」「母親観」については，一貫した方向への変容は見い出されていない。しかしこれらも，今後の育児過程の中で変容していくものと思われる。もっとも，変容の方向は，個々人の育児体験に大きく依存するため，現段階での予測は不可能である。

最後に生活的測度の分析結果に言及しておく。「授乳方法」については，変容した絶対数が少ないことには注意を要するが，有意に母乳指向へと変容していることが分かる（$p<0.05$)。先述の，希望と現実との混乱が顕著に見受けられたのが「就労希望」の項目である。というのも，この項目には無回答・複数回答に加えて，“産休中である”とか“自営業である”といった付記が数多く見られたのである。ただ，有意ではないが，就労を少しずつ遅らせる傾向は見て取ることができる。

考　　察

本研究には，項目設定の不備や各項目間にどのような関連があるかについての分析がなされていないこと，などの問題点はあるが，本研究の結果から，以下の3点が暫定的・部分的にせよ確認されたことと思う。

1) 出産体験そのもの，およびその延長としてのわが子との対面・接触・授乳等の体験が，産婦の情緒に影響を及ぼすことは必至であり，それも不快な方向へではなく，積極的に新しい生命を受容する方向へと，心理的変容を促す。

2) ある種の観念は，非常に固定的であると考えられるが，出産にまつわる経験は，その観念を変容させるに足る衝撃力を有している。

3) わが子との経験は，部分的にせよ，生活設計の修正を積極的に甘受させるだけの影響力を持っている。

情緒的変容について，特に強調しておきたいのは，変容以前に，つまり妊娠後期において，既に出産後と同様の傾向にあり，そしてその傾向が，出産を経てさらに極端になることである。妊娠後期においては，ほとんどの妊婦がわが子に対して受容的になっていることは，上田（1982）が指摘する通り[7]であるが，妊娠を知った時，さもなくば胎動初感から高揚してくると考えられている心理的変容性が，出産過程に到っては『情緒的ピーク』を迎えることになるのである。このような『情緒的ピーク』という考え方は，産後在院期間中の母親の自己愛的傾向（上田，1979）や産褥期の精神障害の問題などを考慮すると，全く的外れな推論ではないのではなかろうか，と思われる。そのことは，自由記述の欄へのコメントからも伺える。そこには分娩の苦しみ・痛み，出産の喜び，わが子への感激が，こと細かく記述されていたのである。また，女性（母親）の強さ・生命の貴さや育児に対する責任感の認識，自分の両親に対する感謝など，ある種の観念の変容を訴える者もあった。このような情報も，今後の研究へつなげていくことが肝要である。

しかし，本研究で扱われている「出産」には，わが子との対面・接触・授乳といった相互作用がすでに含まれていることには充分注意しなければならない。というの

は，出産そのものではなく，それに続く母子相互作用が心理的変容に大きな役割を果していると考えられるからである。“お乳を含ませているとき実感が湧いた”“初めて見たとき感動して涙が出てきた”という記述が目立ったことからも推察することができる。もっとも，縦断研究のデザインとしては，この問題は克服され得ないのが現状である。

さらに，本研究では医学的諸要因についてのデータが収集されていない。妊娠期間において，プロゲステロンやエストロゲンといったホルモンが重要な役割を果しているわけであるが，それらは分娩後急激に低下することが知られている。そのような内分泌系における変化が，妊産婦の心理的諸問題を誘発させる（K. Dalton, 1980）可能性も，今後併せて考えていかなければならない。

産後在院期間中において，産婦は『情緒的ピーク』を迎え，子どもを受容する準備は充分に整っているものと考えられる。このことは，今後の育児の中で，重要な土台（望まれた子どもであり望まれない子どもではないという意味で）ができていることを示唆しているが，決してその後を予測し得るものではない。なぜなら出産過程はあくまでも出産過程であって，育児過程とは本質的に異なるからである。『情緒的ピーク』という考え方が受け入れられるならば，図1のような仮想的過程モデルも想定できるのである。即ち，妊娠・出産過程の心理は，一種独特のものであり，母親としての意識に多少の影響力は有するものの，結局は，受胎までに形成されてきたパーソナリティを多分に反映したものであるのかも知れない。あくまでも仮想的過程モデルであるが，「生みの母より育ての母」ということばもある。初産婦だけでなく，経産婦をも対象にすることによってある程度解明できるのではないか，と考えている。そのためにも，組織的な長期的縦断研究が待たれるところである。もちろん，広く受け入れられるような「母性」の操作的定義の確立も早急になされるべきであることは言うまでもない。

非常に多くの問題点を残しながらの研究ではあるが，女性が母親となる過程には，特に今後，充分なスポットが当てられなければならないと痛感している。“この気持ちは，実際に出産経験をした女性にしか分からないと思う”（調査票より）という記述から想像できるように，とかく男性がこの種のことに着手しようとすると，母親批判の材料探しのごとく思われがちであるが，そうではない。避妊法を教えもしないで，人工妊娠中絶は法に背く，といった悲劇（Association〈Choisir〉, 1987）と同様，いわゆる親教育（この場合は親準備性教育とでも言

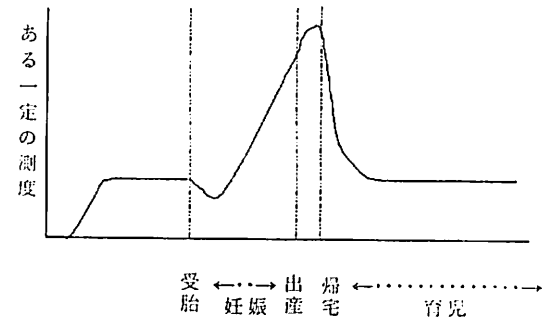

図 1　仮想的過程モデル

おうか）もされないまま，母親として失格だとか，母性喪失だとかいった議論の非生産性・不毛性を感じるからである。当然のことながら仕方がないでは済まされるものではなく，平井（1975）の仮説のような測度が明確にされれば，資するところは非常に大きいであろう。

註　釈

1) 臨床報告では，かなりドラマティックに母性喪失と子どもの障害の因果づけがなされているが，その意味では信憑性に乏しいものもある。
2) 女性に「産む性」というレッテルを貼り付けている，という批判（e.g. 青木やよひ（編）1985　誰のために子どもを産むか 性と生殖のフィロソフィー オリジン）があるが，「産まなければならない性」と言っているのではない。ただこの種の論議には，生まれる子どもの側からの視点が欠けていることを指摘しておきたい。
3) 上田（1979）によると，「産褥期の母性意識といわれるものは非常に不安定であり，母親はまだ自分が周囲からの関心の中心であると感じているし，子どもを自分の作品・業績のように感じている」（p. 29）のである。
4) 「実施日」の欄の配置が悪かったのか記入漏れが目立ったため，出産後の経過日数が分からない。ただ，1週間内であることだけは確かである。
5) ［I］と［II］で“うれしい”から“良かった”と表現を変えてしまったために，純粋に同一項目とは言えないことに留意しておく必要がある。
6) 久冨善之と佐藤郡衛（1985）の調査項目を採用した。結果的には，本研究の方が「授かる」意識が一貫して高かったが，「つくる」意識への変容がある程度認められる点では一致している。
7) ここで上田は，妊娠期間中一貫して否定感情を持ち続ける者はほとんどおらず，胎動の実感と共に肯定感情に変わっていくのが通常だ，としている。先の大日向（1981）の結果と真っ向から対立しているわけであるが，これも確固たる測度がないことに起因していると言えよう。

引用文献

Association 〈Choisir〉 (ed.) 辻 由美 (訳) 1987 妊娠中絶裁判 マリニクレール事件の記録 みすず書房

Dalton, K. 1980 Depression After Childbirth. London: Curtis Brown

平井信義 (編) 1976 母性愛の研究 同文書院

久富善之・佐藤郡衛 1985 初産婦の産育意識に関する質問紙調査分析 日本教育社会学会第37回発表要旨集録

細井啓子 1981 ナルシズム的傾向に関する発達的研究 (1) 妊産婦について 心理学研究, 52, 1, p.p. 28-44

九嶋勝司 1978 妊産婦の心理 周産期医学, 8, 7, p.p. 787-791

大日向雅美 1981 母性発達と妊娠に対する心理的な構えとの関連性について 周産期医学, 11, 10, p.p. 1531-1537

大日向雅美 1982 母性を問い直すとき 佐々木保行・高野陽・大日向雅美・神馬由貴子・芹沢茂登子 育児ノイローゼ 有斐閣新書 p. 146

利島 保 1983 妊産婦の母性形成 周産期医学, 13, 12, p.p. 2129-2132

詫摩武俊・大日向雅美 1976 わが国における「母性意識」の変遷について 安田生命事業団年報, 12, p.p. 108-123

上田礼子 1979 育児の出発点としての周産期 2) 母性意識の発達 周産期医学, 9, 1, p.p. 27-31

上田礼子 1982 母性の精神的特徴 日本母性衛生学会 (編) 新母性保健 南山堂

牛島義友 1970 家族関係の心理 金子書房